

國學院大學學術情報リポジトリ

民俗のサクラと万葉のサクラと

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大石, 泰夫, Oishi, Yasuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000052

民俗のサクラと万葉のサクラと

大石泰夫

序

『万葉集』にうたわれた植物、いわゆる「万葉植物」（こういう呼称は他の文学作品にはみられないが）の中でも、桜ほど様々に論じられてきたものはなかるう。ここでは『万葉集』に、と記したが、実際には日本文学の範疇を超えて日本人の精神文化と関わらせて古くから論じられてきた。そのことは長い歴史の中で、桜がもつとも日本人に愛される植物であり、多くの文化を形成しているということを示している。

そうしたことから、当然のことながら民俗学からの桜についての議論があり、また『万葉集』研究の立場からの議論もあり、これを切り結ぶ研究もある。ただし、万葉時代の桜についての民俗が伝わるわけではないので、後世の民俗から民俗に根ざした発想を『万葉集』の歌から読み取るという方法がとられるので、既に結論は出尽くしているようにも思われる。しかし、改めて民俗学の立場からの議論を様々な事例から確認し、一方『万葉集』桜の歌についてもその表現のあり方を確認することには意味があると考ええる。

本稿では、民俗伝承におけるサクラを再確認するとともに、

『万葉集』の桜の歌の表現を漢詩文なども視野におきながらそのあり方を検討し、両者を切り結ぶ議論を検討してみたい。

一、ハナとサクラの民俗学(1)―語源説をめぐって

ハナとサクラについての民俗伝承をもとに、民俗文化におけるサクラの意味を説いたのは折口信夫であった。

花と言ふ語は、簡単に言ふと、ほ・うらと意の近いもので、前兆・先触れと言ふ位の意味になるらしい。ほす、き・はなす、きが一つ物であるなどを考へ併せればわかる。物の先触れと言うてもよかつたのである。

― 中略 ―

三月の木の花は桜が代表して居る。屋敷内に桜を植えて、其を家桜と言つた。屋敷内に植ゑる木は、特別な意味があるのである。桜の木も元は、屋敷内に入れなかつた。其は、山人の所有物だからと言ふ意味である。だから、昔の桜は、山の桜のみであつた。遠くから桜の花を眺めて、その花で稲の実りを占つた。花が早く散つたら大変である。観考へて見ると、奈良朝の歌は、桜の花を賞めて居ない。観

賞用ではなく、寧ろ、実用的なもの、即ち、占ひの為に植ゑたのであつた。万葉集を見ると、はいから連衆は梅の花を賞めてゐるが、桜の花は賞めて居ない。昔は、花は観賞用のものではなく、占ひの為のものであつたのだ。奈良朝時代には、花を観賞する態度は、支那の詩文から教へられたのである。

― 中略 ―

桜は暗示の為に重んぜられた。一年の生産の前触れとして重んぜられたのである。花が散ると、前兆が悪いものとして、桜の花でも早く散つてくれるのを迷惑とした。其心持ちが、段々変化して行つて、桜の花が散らない事を欲する努力になつて行くのである。桜の花の散るのが惜しまれたのは其為である。

折口は花(ハナ)の語源を「ほ」「うら」から説いて、これを「物の先触れ」とし、特に花の中でもサクラは暗示のために重んじられ、生産の前触れとして重んじられたと述べてゐる。

この折口の見解を展開させたのが櫻井満である。櫻井の最初のサクラについての説は、『万葉集』の柿本人麻呂作歌の「花

散らふ」という表現をめぐって、万葉学会の機関誌『万葉』第四十号（昭和三十六年（一九六二）七月発行）に掲載された「花散らふ」と「み雪ふる」の発想」という論文で示された。

そもそもサクラという語は、サは田の神、穀霊の名、クラは神座としての意義が存したらしいのである。すなわち、サクラは穀霊をむかえる憑代——穀神のこもる花として、農耕生活のうえに関与するたいせつな花であった。穀霊は当然地霊の一部国魂たる山神の配下でもあったわけで、桜を呪農の花、秋のみのりの兆としてながめてきた長い民俗生活があり、今日もなお「花見」と称する民間伝承があり、遊楽化した、「お花見」がある。『万葉集』の桜の歌には、山の桜をよんだものが多いのもここに起因する。

櫻井は折口の手紙を「物の先触れ」とする語源説を受けて、サクラとは「サ」（田の神）＋クラ（依り代）という語で、田の神が依りつく植物、「穀神がこもる花」とする。そして、花見の民俗等を例に挙げながら、この呼称はサクラを「秋のみのりの兆」としてながめてきた民俗生活に基づくものであるとした。

この考えをさらに具体的な民俗事例を補強して展開したが、昭和四十九年（一九六九）刊行の『花の民俗学』（雄山閣出版）においてである。この書物の中で櫻井は、前掲の語源説を記した後、

その花は、田の神の意志の発現であると信じられたに違いない。それは、田仕事に取りかかろうとする時期に、バツと咲くみごとな花に名づけられたのであろう。種蒔・打桜・田植・田植桜などと呼ばれるもの、その花の咲くときを自然の暦にした生活の名残である（付録「植物伝説選」参照）。秋田県鹿角郡宮川村などでは、田打桜・田植桜はコブシのことで、その開花期には稲田の用意に田を打ち始めるのだという（川口弥治郎『自然暦』）。三、四月、芳香のある白い大きな花を開くコブシが、田の神の依代——サクラと観想されたのであろう。サクラということばの成り立ちがよくわかる。ちょうど「門松」のようにいわゆる松以外の木を立てても年神の依代として門松と呼ばれることと同じである。要するに穀神の依代の名がサクラであり、その代表的な植物がサクラと呼ばれることになったとみてよいのではなからうか。

と論じている。当初の櫻井の語源説は、田の神の依り代がサクラと呼ばれたとするものであるから、他の植物であつてもそう呼ばれる可能性を示しており、なぜ今日サクラと呼ぶ植物に限定されるのか、という問題を残していた。しかし、これを展開させて、サクラと呼ばれる植物の田の神の依り代としてふさわしい機能として、稲作の始動時を示す「種蒔桜」「田打桜」「田植桜」と呼ばれる農事暦と関わる例を挙げ、しかも桜ではないこぶし辛夷をサクラと呼ぶ事例を挙げるといふ形で補強したのである。

この後、和歌森太郎『花と日本人』昭和五十年（一九七五）、西山松之助『桜の文化史』昭和六十年（一九八五）⁴も、この「サクラ」を主張することになり、今日ではこの語源説は広く普及している。⁵

二、ハナとサクラの民俗学(2)——種蒔き桜をめぐる

民俗事例からハナとサクラの語源を説明するということは、要するに事例から導き出す仮説である。それを考えるために、農事暦とサクラが関わりとされる事例をもう少し確認してみた

い。

櫻井が、川口弥次郎の書物を紹介することで示したコブシをサクラと呼ぶ例は、早くに菅江真澄も記している。

たねまきざくら

雪のや、消コブシなんころ、辛夷の花咲るを、出羽にては田耕桜といひて、そのころ田をうち、苗代の種蒔ころ、こと国にヒギサクラいふ彼岸桜の花咲ば、たねまき桜といひ、また芳野桜などもいへり。ひがん桜にも、ふたくさみくさあり。甲斐国鶴ノ郡山路にて問へば、柴桜といへり。国々ところツル々にて名のかはるのみならず、花もつゆのかはりぞありける。また、猩々袴といふ艸あり。そがから名は、春雪紅とかいへり。是を秋田ノ比内ノ扇田にて、田打菊といへり。また時鳥をしでのたをさといふはみやびごとなるを、そを田殖鳥タウエドリといへる処あり。津刈にて五月鳥といふ処あり。そは、みな花を見、鳥を聞て、そのときサツキヤサリ々を知りて田佃るこそ、暦なきいにしへの風のこりたれ。（『しののはぐさ』）⁶

真澄は、この中でコブシを「たうち桜」、彼岸桜・芳野桜を「たねまき桜」と呼んでいる例を紹介し、それ以外にも農耕の

自然暦を示す動植物を挙げている。

また、文政五年（一八二二）三月五日に大戸（秋田市上北手）の松測家に滞在していた真澄は、次のように記している。この日は松測家の稲の種蒔きが行われたのだった。

五日、けふは苗代のたね水にひちほしたるを、人さには集りて、大桶に湯をみたらして、湯漉しな^{トコ}いふ事もしはてて、床に寝^ネさすてふことをするに、湯種蒔^{ユタネマキ}てふ歌の意ぞ知られたる。家の後の山に紅の薄花桜いと高き木に咲^{サケ}たり。此花種蒔^{タネマキ}くときに咲ば、たね桜といひ、又、秋田の色づくころは、いつも紅葉すれば、そを見て稲刈り初^{ハジメ}るに、いとよきためしな^シど人のいふを聞て、

紅葉するころはいね刈る苗代のたねまきざくら今咲にけり
（『筆の山口』）

菅江真澄が記述する多様な農作業と関わるサクラは、農作業における限定的な時ではなく、田打ち・種蒔き・稲刈り（紅葉の頃）を知らせるものとしてみられていたことを示している。関東以西の平地部では、春になると「梅から桜」といったように梅から桜に引き継ぐように花が咲くが、東北ではこのような

状況はなく、いきなりいろいろな春の花が咲く。桜だけでも日本に四〇〇種以上あるといわれるが、開花時期が多少異なる様々な桜に加えて辛夷なども同時に花をつける。したがって、いろいろな木に咲く花が、稲作暦を告げるサクラと呼ばれていることになる。このことは櫻井の語源説の確かさを証明している。

平成二十四年（二〇〇四）に岩手県奥州市教育委員会は、種蒔き桜（奥州市江刺区梁川字市道）と伝承される樹齢約四〇〇年のエドヒガンの巨老木を天然記念物に指定した。天然記念物であるので、植物としての価値を認めてのものであるが、指定書を作成するにあたっては種蒔き桜と呼ばれている文化的意義を重視し、自生している場所の歴史や伝承なども記録に留めるために文献調査や聞き取り調査を行って、文化財保護審議会に諮問して指定するという手続きを取り、天然記念物の名称としても種蒔き桜を活かした。

この種蒔き桜のある地は、旧江刺四十一ヶ村（明治八年まで）の一つである栗生沢村^{くりゆうざわ}にあり、側に追分石があつて、古道の交差点に位置している。また、必ずしも高台にあるわけではないが、栗生沢集落のどこからでも見える位置にある。現在この集落には、他にこのような桜はなく、集落の一本桜というよ



咲きはじめた種蒔き桜（岩手県奥州市江刺区梁川）

うな印象で、住民にしても通行人にしても旧栗生沢村の象徴的存在となっている。自生する地は、白山神社の別当であり藩政時代に肝入をつとめた栗生沢村の有力者小澤氏の所有地で、小澤家の墓地でもあった。年号が読み取れるもつとも古い墓石は、寛延四年（一七五二）のものであり、県指定無形民俗文化財金津流梁川獅子躍に關係する供養碑（文政五年（一八二二））も残されている。また、多数の墓石に混じって、支石に天井石が載せられたテーブル状の石造物が残されている。これを小澤家では古墓と呼び、「下には宝が埋まっているが絶対に掘ってはいけない」と伝えているという。このようにこの種蒔き桜が自生する場所は、特別な地と伝承されているのである。樹齢約四〇〇年ということから推察すると、年号が読み取れる墓石は種蒔き桜のもとに置かれたということになるが、テーブル状の石造物は種蒔き桜よりも前に置かれたもので、それがあある場所に種蒔き桜が植えられたということも考えられる。いずれにしても、交通の要衝であり、特別な場所と意識されるところにある種蒔き桜、または種蒔き桜があることによって特別な場所と意識されたということになる。

この種蒔き桜が花を咲かせるのは、今日の暦でいえば五月の連休前頃である。小澤家では種蒔きの時期を逃すと稲作が成り

立たないので、予め種籾をカマスに入れて自宅近くの沢で雪解け水につけておき、一方苗代を準備して、種蒔き桜が咲く頃に遅れないように蒔いたという。戦後に保温折衷苗代が普及して全国に広まり、稲作が一ヶ月早まったことで種蒔き桜としての機能は失われたが、現在でもこのように呼ばれている。

前節の冒頭で、折口のハナが生産の先触れとみられたとする語源説を紹介することから始めて、花の中でも民俗伝承ではとりわけサクラが農事暦の中で重視されていることを根拠にした「サ＋クラ」という櫻井の語源説を紹介した。そして、民俗事例を背景にした語源説と民俗におけるサクラを確認するため、菅江真澄が記した農事暦と関わる多様なサクラの例を紹介した。櫻井も指摘していたことであるが、真澄が紹介するサクラは桜だけをさすものではなく、コブシをもサクラと呼んでおり、農事暦を示す花をサクラと呼んでいたことがわかる。そして、奥州市江刺区梁川の種蒔き桜の事例は、それが自生する場所が地域の特別な場所とみられたことを伝えており、これが穀神の依り代とみられたことを示しているといえる。このことは折口のハナを生産の先触れとみることで、櫻井の「穀神の依代の名がサクラであるとする説を保証している」。

このように民間伝承にみるサクラは、「サ＋クラ」で説明す

ることが有効であり、花見という民俗につながってゆく過程が説明できる語源説ということができよう。

三、『万葉集』の桜の表現と歌の主題

前節では民間伝承におけるサクラを民俗学的にみてきたが、次には『万葉集』にうたわれたサクラの表現を確認し、サクラが歌の世界の中でどのようにうたわれているかをみてゆきたい。

『万葉集』でサクラと表現される例は、四十六例、四十一首、三十三歌群である。四十六例には題詞四例、またこの四例には人名の「桜児」一例を含む。また、三十三歌群には題詞のみの一例を含んでいる。

ただし、この用例には、題詞では桜の花としながら歌には花としかよんでいない場合は題詞のみを数え、歌数には含めていない。また、集中には「花」と表現して桜をさすと推定できる用例も多くあるが、この中には含めていない。

桜の表現を一覧すると、まず四十四例のうち四十一例が「花（ハナ）」をとまなつてよまれていることがわかる。これは「桜（サクラ）」が三音節で成り立っているの、五音節と七音節に

合わせるために、二音節の「ハナ」を加えることで五音節とする例（「桜花（サクラバナ）」が二十三例、さらにこれに助詞を二つ加えて七音節としている例が十六例ある。ちなみに他の三音節の花を例に取ると、桜と同様に「ハナ」を併せてよんでいる割合は、「椿（ツバキ）」が九分の二、「馬酔木（アシビ）」が十分の六、「ツツジ」が九分の三で、桜の割合が非常に高いことがわかる。このように桜という名を表現する時にも、他の花に比して強く花が意識されているのが桜なのである。単に花と表現して桜をさすようになるのも、この意識に基づいているのであろう。

先に引用した折口の論文では「昔の桜は、山の桜のみであった。遠くから桜の花を眺めて、その花で稲の実りを占った。」と記されているが、用例に目立つのは山に咲く桜であることがわかる表現が多く用いられているということである。

春雨のしくしく降るに 高円の山の桜は いかにあはらむ
（巻八・一四四〇番歌、河邊朝臣東人の歌一首）

絶等寸の山の峰の上の桜花 咲かむ春べは 君し偲はむ

（巻九・一七七六番歌、石川大夫の任を遷さえて京に上る時、播磨娘子の贈る歌二首の一首目）

阿保山の桜の花は 今日もかも散り乱ふらむ 見る人なしに
（巻十・一八六七番歌、花を詠む）

というように峰や山の桜がうたわれる。全部で二十首が山ともいうたわれるほか、その中に「山桜花（ヤマザクラバナ）」という用例が三例ある（これについては後述）。

桜をどのようにしてうたうのかということに注目すると、

やすみしし 我が大君の …… 天の下 知らしまさむと 八
百万 千年を兼ねて 定めけむ 奈良の都は かぎろひの
春にしなれば 春日山 御笠の野辺に 桜花 木の暗隠り
貌鳥は 間なくしば鳴く 露霜の 秋さり来れば 生駒山
飛火が岳に 萩の枝を しがらみ散らし……

（巻六・一〇四七番、寧楽の故りにし郷を悲しびて作る歌一首）

鶯の木伝ふ梅のうつろへば 桜の花の時かたまけぬ

（巻十・一八五四番歌、花を詠む）

というように移りゆく季節の春の景物としてよんでいるものもあるが、「咲く」（四十一首中十五首）「散る」（四十一首中十五

首)が桜のありようとしてうたわれている。以下、代表的な例を挙げる。

〈咲く〉

あしひきの山桜花 日並べてかく咲きたらば いた恋ひめ
やも

(巻八・一四二五番歌、山部宿祢赤人歌四首の二首目)

春雨に争ひかねて わが宿の桜の花は 咲きそめにけり

(巻十・一八六九番歌、詠花)

〈散る〉

厚見王、久米女郎に贈る歌一首

宿にある桜の花は 今もかも 松風速み地に散るらむ

(巻八・一四五八番歌)

久米女郎の報へ贈る歌一首

世間も常にしあらねば 宿にある桜の花の散れるころかも

(巻八・一四五九番歌)

春雨はいたくな降りそ 桜花いまだ見なくに散らまく惜し

も (巻十・一八七〇番歌、花を詠む)

〈咲く+散る〉

春三月、諸卿大夫等の難波に下りし時の歌二首 短歌

を并せたり

白雲の 龍田の山の 滝の上の 小椋の嶺に 咲きををる
桜の花は 山高み 風しやまねば 春雨の 継ぎてし降れ
ば ほと枝は 散り過ぎにけり 下枝に 残れる花は しま
しくは 散りな乱ひそ 草枕 旅行く君が 帰り来るまで

反歌

わが行は七日は過ぎじ 竜田彦ゆめ此の花を風にな散らし
白雲の 龍田の山を 夕暮れに うち越え行けば 滝の上の
桜の花は 咲きたるは 散り過ぎにけり 含めるは 咲き
継ぎぬべし こちごちの 花の盛りに あらねども 君が
御行は 今にしあるべし

反歌

暇あらばなづさひ渡り 向つ峰の桜の花も 折らましもの
を (巻九・一七四七〜五〇番歌)
桜花咲きかも散ると見るまでに 誰かも此処に見えて散り
行く (巻十二・三二二九番歌、羈旅に思を発す)

こうした桜の歌をみると、桜が咲き、散ることに對する抒情が
歌の主題となつてゐることがわかる。『万葉集』の歌には、桜
を美的景物として鑑賞することよりも、まず花を強く意識し

て、花が「咲く」「散る」ということに対しての強い感情が表現されているのである。

桜をめぐる文学と文化の歴史については、多くの研究の蓄積があるが、その出発点は桜が咲き散ることに対する思いが、文学の表現に強く表れているということである。そして、ここでみてきたように、『万葉集』の歌から既にそうした表現が中心となっているのである。

四、「咲く」と「散る」をめぐる

桜の文学と文化については、本稿でそれを詳細に論じる余裕はない。ただ、象徴的な議論を一例紹介したい。

兼好法師は『徒然草』の中で、桜の歌とそれに表現される抒情について次のように述べている。

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見所おほけれ。歌のことがきにも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「さはる

ことありてまからで」なども書けるは、「花を見て」と言へるに劣れることかは。花の散り、月のかたぶくを慕ふならひはさることなれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見所なし。」などは言ふめる。よろづのことも、始め終りこそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。逢はでやみにしうさを思ひ、あだなるちぎりをかこち、長き夜をひとり明かし、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとは言はめ。

(一三七段)

兼好は、桜の歌には満開のものがよまれるよりもまだ咲いていないことをうたったものや、散ってしまったことを惜しむ歌が多いことを問題として、満開のものをよむよりこうした歌の方の抒情が深いことを指摘している。

本居宣長は『玉勝間』において、兼好のこの記述を取り上げて次のように述べる。

兼好法師が徒然草に、「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。」とか言へるは、いかにぞや。いにしへの歌どもに、花はさかりなる、月はくまなきを見たるより

も、花のもとには、風をかこち、月の夜は、雲をいとひ、あるは待ち惜しむ心づくしをよめるぞ多くて、こころ深きも、ことにさる歌におほかるは、みな花はさかりをのどかに見まほしく、月はくまなからむことをおもふ心のせちなるからこそ、さもえあらぬを嘆きたるなれ。いづこの歌にかは、花に風を待ち、月に雲を願ひたるはあらん。さるをかの法師が言へることくなるは、人の心にさかひたる。後の世のさかしら心の、つくり風流^{みやび}にして、まことの風流ごろにはあらず。かの法師が言へることども、この類多し。皆同じ事なり。

宣長は兼好の主張を否定して、満開前や散つてしまったことをうたう歌が多いのは、満開の桜をみたいと願う気持ち強いことの表れであるとして、それが桜の歌に嘆きとなつて表現されているのだとしている。宣長は兼好の美意識に対して辛辣であるが、いずれにしてもこの議論のように、桜の花が咲くことと散ることに対して、日本の和歌文学は大きな関心を寄せてきたわけである。

このような桜が咲く、散ることに大きな関心と情を感じるということは、今日でもいえることである。桜の花の咲く頃は、

花吹雪・花曇り・花冷えなどという季語が表わすように、特に氣候の変化が厳しい時であり、強い風が吹く季節である。また、地方によつて差があるわけだが、桜が咲くことによつてようやく寒い季節が終わり、暖かな季節がやってきたことを実感するわけであるから、こうした感情を抱くのは当たり前といえる。したがって、『万葉集』においても桜が咲き、散ることをよむのは当然のことともいえようが、文学の表現としてみる場合には様々な影響を考へてみる必要がある。

折口は先に引用したように「奈良朝時代に、花を觀賞する態度は、支那の詩文から教へられたのである。」と述べている。

ここで、『万葉集』の桜の歌の發想を考へるにあつて、漢詩文における桜について確認してみたい。

まず、『懷風藻』であるが、全一一八首のうち二首に桜がよまれている（以下、漢詩文の傍線は筆者が施したもの）。

五言。春日侍宴。応詔。一首。

論道与唐儕。語德共虞隣。冠周埋戸愛。駕殷解網仁。

淑景蒼天麗。嘉氣碧空陳。葉綠園柳月。花紅山桜春。

雲間頌皇沢。日下沐芳塵。宜猷南山寿。千秋衛北辰。

（采女朝臣比良夫）

五言。初春於作宝楼置酒。

景麗金谷室。年開積草春。松烟双吐翠。桜柳分含新。
嶺高閣雲路。魚驚乱藻浜。激泉移舞袖。流声韵松筠。

(長屋王)

前者の例は「山桜」と表現され、紅色の花をつけた桜がみごとに咲いた春を表現し、後者は桜と柳が訪れた春を象徴的に表す景物として表現されている。ここにみられる桜は春の景物として取り上げられている。辰巳正明は前者の例の解説に「この山桜は六朝詩にみられる山桜と呼応していると思われ、前句の園柳月と対を作ることから、その風景は春の良辰・美景を理念として捉えたものであるといえる。」と述べている。

中国詩では、唐の時代に入ると桜をうたいこむ詩が多く表れる。しかし、それよりも前ということになるとあまり多くの例を見ない。

〈山桜〉

○沈休文「早発定山」(『文選』) 野棠開未落。山桜発欲然。

○蕭填「春日貽劉孝綽」(『芸文類聚』卷三・歲時上)

澗水初流碧。山桜早発紅。

○煬帝「宴東堂」(『煬帝詩集』) 海榴舒欲尽。山桜開未飛。

○陳江「春日」(『陳江總集』) 水苔宜溜色。山桜助落暉。

〈桜〉

○江総「陳宣帝哀策」(『芸文類聚』卷十四・帝王部四)

掃秋葉而無尽。薦春桜而原知。

○撰官「梁小廟」(『芸文類聚』卷三十八・礼部上)

疇昔遊衣所。今日薦桜時。

○左思「蜀都賦」(『芸文類聚』卷六十一・居処部二)

朱桜春就。素奈夏成。

○潘岳「閑居賦」(『芸文類聚』卷六十四・居処部四)

三桃表桜胡之別。二奈曜丹白之色。

○王僧達詩(『芸文類聚』卷八十六・果部上)

初桜動時艷。蟬噪灼輝芳。

○簡文帝皇太子奉答南王寶「朱桜詩」

(『芸文類聚』卷八十六・果部上)

○庾肩吾謝蒙賁「朱桜啓」(『芸文類聚』卷八十六・果部上)

○劉孝綽「綽詠有人乞牛舌乳不付因餉檳榔」(『芸文類聚』卷八十七・果部下) 羞比朱桜就。詎易紫梨津。

山桜の用例には、「発」「開」「落」とともに用いられる例があ

る。また桜も併せてみると、「春」とともに用いられて、春の訪れを示す景物としてうたいこまれている。しかし、ここにとりあげた例では、辰巳がいうように春の美景を理念として捉えたものが多いといえる。

ただ、唐代になると桜をよむ詩が増え、様々な表現がなされておき、桜が咲き、散ることに対する抒情が表現されるものもでてくる。それが『万葉集』に与えた影響はわからない。ただし、『懷風藻』には用例も少なく、あまり影響があるとは思われない。ひとまず万葉歌への直接の影響は少ないと考えられ、桜の花が「咲く」「散る」ということに強い抒情を表現するあり方は、日本の風土の中で培われた発想ということができるのではなからうか。

中西進は次のように述べる。

古来、日本人に親しまれた花は、やはりさくら（桜）である。大体、サクラという名前は「咲く・ら」という意味で、「ら」は親しみをこめてことばの下につけたものだから、花はすべて咲くのに、それを独占しているのが、この花だということになる。それほどにわれわれにとって古くから深い結びつきをもつものが、さくらであった。よく、

『古今集』以後にさくらが花の代表となったように言われるが、これは誤解である。

この桜が『古今集』以後に花の代表となったことについては、『万葉時代は梅が代表』とみる考えであるが、櫻井も『万葉集』の梅について詳細に検討して否定している。^⑩中西はここでサクラの語源として「咲く＋ら」を示している。ここでみてきたように、『万葉集』にみる桜の用例は多く「咲く」「散る」とともに表現されており、桜が咲くということに対して強い思いを抱くということを考えれば、文学表現からみれば中西説は首肯できる語源説といえよう。

サクラの語源については、民俗からみた櫻井説、文学表現からみた中西説を両方支持するような結論となった。しかし、サクラの語源説は先に述べたようにあくまで仮説であり、状況のあり方からみた解釈である。これは両方を肯定できるということに留めておきたい。

結び——文学と民俗のきずな

民俗社会に伝えられるサクラは、その花の開花が農事暦を教

えるものとしての伝承が伝わり、その樹自体を聖なるものとみる伝承がある。おそらくこうしたことから、「サクラ」と呼ばれる樹が、穀霊が依りつくものとみられ、その花が咲くことに穀霊の啓示を感じとったのであろう。こうしたことから導き出されることは、桜の花が「咲く」ことに強い意識をもつことは当然で、また反対に「散る」ということを悲しむという感情も生まれてくることもまた当然の発想である。

一方、日本文学にみられる桜の歌に表現される抒情は、桜の花が咲くのを歎び、散るのを惜しむものを中心となっており、それは『万葉集』から既に獲得された表現である。『万葉集』の歌は漢詩文の影響を受けており、折口は花を觀賞する態度もその影響としているが、桜の歌については大きな影響を指摘できず、桜についてのこの表現と抒情は固有の歌の世界のものといえよう。

そのように考えると、桜の『万葉集』の歌、そしてそれ以降の日本文学の桜は、民俗社会の中で培われた桜に対する発想と無縁のものとは思われない。『万葉集』の歌には、桜が直接農事暦を告げる花であることを示す表現や、桜の花を穀霊の依り代とみることがうかがえる歌はない。しかし、桜の歌の表現は他の花に比して高い割合で花を併せて表現されること、美的景

物として鑑賞することよりも「咲く」「散る」ということに対しての強い感情が表現されていることを考えれば、その基盤に桜が花を咲かせることに穀霊の啓示をみえてきた民俗社会の発想があつたといえよう。

注

- (1) 折口信夫「花の話」『折口信夫全集』2、中央公論社、一九九五年、四三九～四四二頁。
- (2) 引用は櫻井満『万葉びとの憧憬』（桜楓社、一九七八年再版、一六三頁）によった。
- (3) 引用は『花の民俗学』（講談社学術文庫、二〇〇八年、一〇三頁）によった。
- (4) 西山松之助「桜の文化史」『日本の文様』（18）桜、光琳社出版、一九八五年。
- (5) 和歌森も西山も櫻井の説だとしていないが、発表時期からいつて明らかに櫻井にプライオリティーがあり、『日本国語大辞典』は櫻井の説としている。
- (6) 『菅江真澄全集』第十巻、未來社、一九七四年、三二九～三三〇頁。「しのはぐさ」は文化十二年（二八一五）の雄勝郡巡村以降に執筆したとされる。
- (7) 『菅江真澄全集』第十一巻、未來社、一九八〇年、四八六頁。
- (8) 山田孝雄「櫻史」、櫻書房、一九四一年。山田忠雄の校注によって講談社学術文庫より一九九〇年に発行。
- (9) 辰巳正明「懐風藻全注釈」、笠間書院、二〇一二年、二二六～二七頁。
- (10) 櫻井「桜」「梅」『万葉の花』櫻井満著作集第七巻、おうふう、二〇〇〇年、四二～六一頁。